

(別紙様式10)

## 平成 30 年度 北極域研究共同推進拠点 共同研究等報告書

申請区分: ☐ 萌芽的異分野連携共同研究 ☒ 共同推進研究  
☐ 産学官連携フューチャリティ・スタディ  
☐ 共同研究集会 ☐ 産学官連携課題設定集会

研究課題名: 北極域における人新世の生業システム

研究期間: 平成 29 年度～ 30 年度

共同研究員	氏名	所属・職名	専門分野	区分 (注 1)
研究代表者	近藤祉秋	北海道大学 助教	文化人類学	
研究分担者 (拠点外)	大石侑香	国立民族博物館 特任助教	生態人類学	
	野口泰弥	北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課／北方民族博物館グループ 学芸員	社会人類学	
研究分担者 (拠点内)	的場澄人	北海道大学 助教	冰雪学	
	立澤史郎	北海道大学 助教	保全生態学	
研究協力者 (注 2)	林直孝	カルガリー大学 助教	文化人類学	
	ヘザー・スワンソン	オーフス大学 准教授	文化人類学	
	井上敏昭	城西国際大学 教授	文化人類学	

(注 2) 計画申請書に含まれていなかった方でも結果的に本共同研究に参画された方(招へい者等)が居られれば、研究協力者として記述して下さい。

### 【研究の内容】

(1) 図表や写真も交えて、研究の内容や成果等を 1000 字程度で簡潔に以下にまとめてください。

本研究の目的は、北極域に居住する諸社会を対象として、以下の 2 つの側面から北極域における環境と人間の相互作用を明らかにすることである。

#### (i) 生業による適応、レジリエンス

気候変動を含む、近年の人新世的な変化に対して、生業にまつわる在来知識と実践を用いながらどのように適応しているか。とりわけ、それぞれの地域において、狩猟や漁撈、家畜飼育といった複数の生業がたくみに組み合わせられる生業複合の仕組みを明らかにする。

#### (ii) 地域間ネットワーク、植民地化、移動

大規模な変化を経験する北極域の諸社会とその原因と考えられる南の工業社会との間にある(ポスト)植民地的関係は、この適応にどのような影響を与えているか。両者をつなぐ交通路などのイ

ンフラストラクチャーにも着目しながら、北極域における諸社会の文化的生存を北極域と他地域とのつながり、ネットワークから考える。

本研究では上述した 2 つの側面を扱ったが、北極域の諸社会で生じる変動を扱う先行研究において、それぞれが別個の研究領域として扱われる傾向があった。(i)はおもに生態人類学の領域とみなされ、(ii)はポストコロニアル理論やカルチュラル・スタディーズの影響を受けた文化人類学によって探究されてきた。だが、近年、両者を総合的に捉える視座の重要性が強調されるようになってきた。

その背景には、北極域の諸社会が気候変動による環境変化に対する物理的適応を求められているのみならず、南の工業社会との経済的な結びつきによって北極域に住む人々の生業活動が大きく影響されるような事例が頻出しているという事情がある。例えば、ヤマル半島の石油・天然ガス開発はトナカイ牧畜の移動ルートへの影響が懸念されているし、アラスカで大きな問題となっているマスノスケの減少は東アジア市場向けの輸出を前提とした商業漁業による混獲が一因と言われている。他方で、機械化が進む現代の生業活動においては、鉱物資源開発や商業漁業を含む賃金労働による現金獲得も同じく重要度を増している。

ある文化集団の一員として、南の工業社会との関係をうまく調整しながら、変動する北極域の自然環境のなかでいかに自律性を保って生きるか。これは、人間の活動が地球環境の全体に影響を与えるようになったとされる人新世において、北極域の人々が共通して抱える課題である。非北極圏の経済大国である日本が北極域の諸社会への貢献を望むのであれば、彼ら・彼女らのニーズを深いレベルで把握しなければ逆効果を招くことが懸念される。

本研究は、狩猟・漁撈民やトナカイ牧畜民の生業適応に関する民族誌的な調査研究を基礎とするが、環境と人間の相互作用を明らかにする観点から、文化人類学、冰雪学、保全生態学を中心とする学際的な討議をおこなった。本研究の成果の一部は、『北海道立北方民族博物館研究紀要』に収録された特集「人新世の北方漁業史：変わり続ける環境と社会に生きる北方民族」にてすでに発表された。なお、本研究の活動内容は、立澤史郎氏が代表を務めた J-Arc Net 共同研究集会プロジェクトの研究内容とも関わるため、国際ワークショップの共同開催(2019年2月24日)をおこなうなど、協力しながら研究を進めていった。そのため、報告する内容には重複する部分がある。

(2) 本共同研究に関連する活動(出張、研究打合せ、会合等)を実施した場合には、延べ参加人数が算出できるように、下表に記入してください。

日程(月日)	日数 A	活動内容	場所	共同研究員・研究協力 者の参加者名	参加者数 B	延人数 A × B
記入例 2019.11.25	2	研究打合せ	東京	北大太郎、北方次郎、 北野三郎	3	6
2018.11.17	1	研究会	札幌	近藤祉秋、大石侑香、 野口泰弥、的場澄人、 立澤史郎、林直孝、井 上敏昭	8	8

【研究論文や著書等】

著者名(共著者名含む)、発行年、論文タイトル、掲載誌名、巻・号、ページ数、DOI、査読の有無、インパクトファクター(IF、分かれば)、分野(表下にある(注3)から一つ番号を選択)を記入して下さい。

著者名, 発行年, 論文タイトル, 掲載誌名, 巻・号, ページ, DOI	査読の有無	IF	分野 (注3)
記入例: Hokudai, T., and Kitakata, J.(2019): Clarification of meteorological variability in the Arctic and migration of salmon, <i>Current Biology</i> ,30,4-8, 10.1021/jo0349227	○	9.9	①
近藤祉秋 (2018)『『アラスカ物語』の後で：グイッチン社会の狩猟をめぐる文化復興・政治・文学』北海道立北方民族博物館（編）『North to the Future：日本人が出会ったアラスカ』（第33回特別展図録）北海道立北方民族博物館、pp. 40-45。	×		②
近藤祉秋 (2018)「食料主権論からみたアラスカ先住民の生業と伝統食の現代」『日本食生活学会誌』29(1), pp. 5-9.	×		②
近藤祉秋 (2019)「マルチスピーシーズ人類学の実験と諸系譜」『たぐい』1, pp.126-138.	×		②
近藤祉秋 (2019)「人新世の北方漁業史：変わり続ける環境と社会に生きる北方民族」『北海道立北方民族博物館研究紀要』28, pp. 1-6.	×		②
近藤祉秋 (2019)「内陸アラスカ・クスクイム川上流域におけるサケ漁撈史と現代的課題」『北海道立北方民族博物館研究紀要』28, pp. 7-31.	○		②
大石侑香 (2018)「シベリア先住民の現在・未来：スィニャ・ハンティの年金生活者の生業活動とその役割」吉田睦・永山ゆかり編『アジアとしてのシベリア：ロシアの中のシベリア先住民世界』（分担執筆、第2章担当）、勉強出版、pp. 193-210。	○		②
大石侑香 (2019)「社会・環境適応におけるハンティの内水面漁撈の柔軟性」『北海道立北方民族博物館研究紀要』28:33-44。	×		②
Юка Ойши (2019) «Функции рыболовства пенсионерами в селе коренного населения» Проблемы и перспективы освоения Арктической зоны Северо-Востока России, 52-55, СВФУ: Анадырь.	○		②
野口泰弥, 2018, 「イントロダクション:アラスカと日本人の関係史一戦前・戦中までの先住民との接触を中心に」『第33回特別展 North to the Future』pp.4-9.	×		②
野口泰弥、大島稔,2019,「日本人によるアリュート民族の研究(1):春日部薫著『アリュート族に関する報告』(1943年)と注釈」『北海道立北方民族博物館研究紀要』28: 85-110	○		②
Hiroya Noguchi and Shiaki Kondo (In Press) Hunting tools and prestige in Northern Athabascan culture: Types, distribution, usage, and prestige of	○		②

Athabascan daggers. <i>Polar Science</i> (ISAR-5 Special Issue). Page # unknown. <a href="https://doi.org/10.1016/j.polar.2019.03.003">https://doi.org/10.1016/j.polar.2019.03.003</a>			
的場澄人(2018)「2016年12月にグリーンランド北西部カナック村で生じた海水流出事故と漁業被害ーグリーンランド北西部における社会・自然環境と生業の変化ー」『北海道の雪氷』37: 51-54。	×		①②

(注3) 分野:① 環境&地球科学 ② 人文社会系 ③ 工学 ④ 基礎生命科学 ⑤ 化学  
⑥ 材料科学 ⑦ 物理学 ⑧ 計算機&数学 ⑨ 臨床医学

### 【研究発表】

以下の事項をご記入ください。

発表年月日、発表者名(共著者を含む)、発表タイトル、発表学会等名称、発表地(国、県、市など)、招待講演についてはその点も明記してください。

発表年月日	発表者名	発表タイトル	発表学会等名称	発表地	招待講演 (○)
記入例 2019.8.28	北大太郎(A 大学 a 学 部)、	北極域の気象変動と サケの回遊関係の解 明	第 35 回北方圏国際シンポ ジウム	紋別	○
2018.5.10.	近藤祉秋	在来知を活用した自然資源管理に向けて：内陸アラスカ・サケ管理の事例から	北極域研究推進プロジェクト (ArCS) 平成 30 年度プロジェクト全体会合	横浜	
2018.7. 26	Shiaki Kondo	On Athabascan Visions for Provisions: Culture Camp and Education for Food Security in Interior Alaska.	12th Conference on Hunting and Gathering Societies	マレー シア、ペ ナン	
2019.2.21.	Shiaki Kondo	Gotta Go and Live! Immobility and Foraging Ways of Life in Interior Alaska	Tohoku Forum for Creativity “Northern Modes of Foraging and Domestication as an Interaction among Humans, Animals and Geography.”	仙台	○
2019.2.24	Shiaki Kondo	Building Communities around Sea Lion Meat: Changing Subsistence and Tourism Practices in Rebun Island,	International Workshop “Rethinking Arctic Community Building in the Anthropocene.”	札幌	

		Hokkaido			
2019.3.5.	Shiaki Kondo	Human Dimensions in Global Change: A Review of Japanese Contributions	ArCS Workshop for Promoting Collaboration between IARC/ UAF and Japan	米 国 フ ェ ア バ ン ク ス	○
2019. 3. 9.	Shiaki Kondo	Who “Owns” TEK?: Reflections on Documentation, Publication and Application of Indigenous Knowledge	IRIS Project Workshop “Identifying Challenges and Potential Solutions in Protecting Indigenous Heritage in Japan and North America”	カナダ・バーナビー	
2018.5.25	大石侑香	シベリア北方少数民族の年金生活者: 村落におけるマイナーサブシステムの交換と役割	平成 30 年度 SRC 公開講座	札幌	○
2018. 6. 17	大石侑香	毛皮の装いの文化から見たハンティの動物観	日本シベリア学会第 4 会 研究大会	三重	
2018. 7. 5	Yuka Oishi	Fishing-herding complex and ecological adaptation of Khanty in Western Siberian forest	2018 Summer International Symposium: On Land, Water and Ice: Indigenous Societies and the Changing Arctic	札幌	
2018.12.22	大石侑香	シベリアの毛皮動物の狩猟と世界システム: 女性の欲望に着目して	東北アジアを中心としたアジア地域における動物資源利用問題と「人間性」: 生業、娯楽、奢侈の観点から	仙台	
2019.2.21	Yuka Oishi	Domestication in fishing-reindeer husbandry complex of Western Siberian Forest from the point of view of environmental history	Tohoku Forum for Creativity: Geologic Stabilization and Human Adaptations in Northeast Asia, Workshop 4: Northern Modes of Foraging and Domestication as an Interaction among Humans, Animals, and Geography	仙台	○
2019.3.16	大石侑香	西シベリア・ハンティのトナカイ飼育と生	日本文化人類学会近畿地区研究懇談会 2018 年度	京都	

		態適応：漁撈牧畜複合の民族誌	修士論文・博士論文発表会		
2019.2.20	Hiroya Noguchi (HMNP)	Rethinking Domestication: Captive Elephant Management in Southern Indi	Workshop for young scholars for Anthropology “Domestication and the North”	仙台	
2019.2.24	Toshiaki Inoue (Josai International University)	Crossing three boundaries to establish “one voice” Activities by Yukon River Inter-Tribal Watershed Council	International Workshop “Rethinking Arctic Community Building in the Anthropocene.”	札幌	

#### 【特許等】

特許・実用新案・商標などの出願がありましたら記載願います。

例) 特許第〇〇〇号(特願〇〇〇-〇〇〇)「発明名称〇〇〇〇〇〇〇〇」

#### 【本共同研究の枠組みで実施した集会(注 4)等】

(注 4) 共同研究者、研究協力者、招へい者以外を含む参加募集によるもの)

実施日、実施地(国、県、市など)、集会等名称、概略内容、対象者(「主に研究者」あるいは「主に研究者以外」)、参加人数(「主に研究者を対象」とした場合は外国研究機関の所属者の内数についても括弧内に明記ください。)

実施日	実施地	集会等名称	発表名・概略内容	対象者	参加人数 ( )
2020.2.21	東京	北極問題研究会	北極域の油流出に関する最近の事例と原因究。2012～2017年の北極域における油流出事故に関する情報解析と可能な対応策について提案	主に研究者	35(5)
2019.2.24	札幌	Rethinking Arctic Community Building in the Anthropocene(共催)	現代の北極域における生業の変遷と課題について討議。立澤史郎氏、林直孝氏と共同開催。会の詳細は両氏作成の報告書を参照。	主に研究者	20(3)

【本共同研究の発展】

本共同研究の成果が科学研究費などの外部資金の応募やプロジェクトに発展した例があればご記入ください。

今後、本共同研究の成果に基づき、国立民族学博物館共同研究(若手)に申請する予定である。

【アウトリーチ、取材、その他】

取材・新聞掲載などがありましたら、日時、新聞名、記事コピーを添付して頂くようにお願いします。

・大石侑香 2018 年 12 月 5 日朝刊『日経新聞』

・大石侑香 2019 年 3 月 6 日朝刊『朝日新聞』